

落馬した村

なんかかゆい

「だいぶ前からバイクにどっぷりはまっつて、最近じゃあ毎日食前に歯を磨くんのだ」

それが吉田の最期の言葉だった。

吉田の葬式が終わり、手袋を脱いでかばんにしまっていると、中学時代の親友だった榎本が俺に声をかけた。

「篠崎、何年ぶりだ？ 懐かしいな。しかし、まさかあの

吉田がね」

榎本は昔がたいのいい陸上部員だったのだが、声を聞くまで彼だと判断できないほど太っていた。

「榎本か。お前はファトワー・センターの職員になったんだよな。今日はいいのか？」

「これだ。FCといえどもこれがなきやあな」

榎本は小指と薬指を折った右手を振る仕草をした。

体格は変わっても、中学時代のやんちゃな性格は変わってないらしい。俺は学生時代を思い出した。

「そういえば榎本は委員長と結婚したと聞いたが」

と俺は尋ねた。

委員長というのは当時の佐藤という成績優秀な女子で、榎本とよくくっついていたのを覚えている。榎本の性格からして、仰仰しく自慢するとも思っていたが、榎本は少し落ち込んだ様子でうつつむいて言った。

「実は……去年離婚したんだ」

「え？」

「リャンベイでね」

「そうか……」

言葉が見つからなかった。最近リャンベイの被害が広がっているとは聞いたが、佐藤のような既婚の女性も受けているとは思わなかった。榎本はしばらく黙っていたが、急にぎこちなく笑った。

「吉田の野郎、食前に歯磨きするほどバイクにメロメロだったとはね。俺みたいなのSDSまがいの輩が許される代物じゃない」とか言っておいて」

「屋根瓦でさ。最近じゃ資本主義だなんだといっても、三分の一がやっとなんだ」

「やはり屋根瓦だったのか。俺もがんばらなきゃな……」

口元は笑っていても、榎本の目には涙が浮かんでいた。

俺はポケットから領収書を取り出した。

「泣くなよ。つかえ棒には洗顔だと昔から相場が決まっている」

俺は領収書を榎本に渡した。

「ありがとう。しかし、高くついたな」

「中東辺りのとばっちりだね。下手に十字を切ったらバ―だぜ」

榎本の目つきが変わった。

「そうか……ずっとFCに勤務していたから知らなかったが、お前も参加していたのか」

「FCなら、石油関係の金の流れは把握できてたろう？」

彼はどこか腑に落ちない様子だった。

「しかしあの短気な君がね。嫌にならなかつたかい」

「実は吉田もそうなんだ」

「ああ……知っていた」

俺たちは吉田のことを話しながらしばらく歩き、喫茶店に入った。

榎本は座るなり、机を蹴飛ばした。俺はあわてて制止した。

「よせ。関東では通じるかもしれないが、それは養殖ものだ」

俺はすぐに机を元の位置に戻した。

「これもか。しけてるなあ。当たる位置が悪かつたかい」

榎本は残念そうに言って、床に痰を飛ばした。彼は足を痛めたようで、足の甲を押さえていた。

「そうだ。喫茶店なら、ひざが妥当だった。いくら陸上部だったからといっても足の甲はさすがにだめだ。俺ですらここんとは足の甲は控えてるんだ」

そう言いながら俺は靴を脱ぎ、靴下も脱いで席に座った。最近では靴より先に靴下を脱ぐのが流行だが、俺はやらな

い。そのほうが格好いいからだ。

ウエイトレスが来た。

「ここではひとつねりいくらだい」

と俺は聞いた。ウエイトレスが小慣れた様子で答えた。

「百六十円でございます」

榎本は吹き出した。

ことがあったような気がした。

「あれは中学の夏休みのことだった。夏祭りが終わり、俺がひとり薄暗い河原でたたずんでいると、吉田がおもむろにわさびを俺の顔に塗りたくってきた。それは一人の少年が背負うには、あまりにも大きすぎる水道管だった。

「水道管か」

メキシカン金魚すくいをしていたはずの榎本が全速力で俺の方に走ってきて、ぜえぜえあえぎながら言った。

「そうだ。水道管だ」

となりになっていた委員長、佐藤も言った。

「水道管ね」

ほほほ、と彼女は笑った。

俺は思い出した。

目の前にいる宇宙は、佐藤だった。

「佐藤……なんだろう？」

俺はおずおずと聞いてみた。彼女は真顔だった。榎本も黙った。

「はい。しかし私の今の姓は杉島です。再婚しましたから」
榎本は脱ぎ捨てられた服を拾い集め、再び着始めた。そしてぼつりと言った。

「リャンベイ……」

彼女の眉が一瞬動いたように見えた。彼女は榎本に向き合い、冷たい口調で言った。

「リャンベイはあなたと別れるためについた嘘だったのよ」

シャツのボタンを止めていた榎本の手が止まった。俺は早くここから逃げ出したかった。彼は再び服を脱ぎ始めた。

「所詮男は、SDSだろうがイラク工作員だろうが、FC

だろうが……女性にはかなわないってことだな」

彼は冷静だった。そして今までの彼の行動からは想像できないような紳士のように滑らかな物腰で、全裸のまま席を立った。

「片付けを頼む」

彼はそう言うのと陽気に鼻歌を歌い、太った下腹を調子よく叩きながら店を出た。店には俺と彼女だけが残った。彼女は元夫の脱ぎ散らかした服を片付けながら言った。

「吉田くん、残念だったね」

「知っていたのか？ 佐藤、いや、今は杉島さんか」

「ええ、昨日会ったから。でも、今朝逝ってしまうなんて……、あら」

彼女は俺の渡したティッシュを見るなり不快感を覚えたようだった。

「これ、血がついてない？」

「慣れないもので、包丁でちよつと切ってしまった。でも、ティッシュは使用後の方がいいだろ？」

「そうだけ」

彼女は血のついたティッシュで顔を拭いた。宇宙に煌めく新たな銀河が誕生し、それは燎原しょうげんの火のごとく燃え広がったように思えた。

「もしかしてあなた、まだ独身だったの」

「まあね。家事は全部俺が。でもそんなに不自由しないよ」

「嘘。学生時代に隠れてスタンディングオベーションの練習してたの知ってたんだから」

「あれは単にコンサートが近かったからだ」

くだらない会話に心底飽きてきたので、俺はかばんの中にしまっておいた包丁を取り出し、彼女の大腿部を刺した。

彼女は悲鳴を上げた。宇宙が震えた。

「泣くほど痛かったかい。これだけは言っておくが、あいつはちゃんと店の机を蹴ってから注文したんだぜ」

俺は痙攣けいれんしている彼女の足から包丁を抜き取り、店を出た。街の大きい通りを出ると、歩道橋を渡っている榎本の姿が目に入った。俺は急いで彼を追いかけた。彼はまだ鼻歌を歌っていたが、俺が追っているのに気がつくつと四つん這いの体勢になり、俺に声をかけた。

「どうした。そんなに息を切らして」

「彼女はやはり、昨日吉田に会っていた」

「そうか……うん、そうだったのか。おい、その包丁をしまえよ。刺してきたのか？」

俺はあわてて包丁をかばんにしまった。

「え、榎本、お、お前は吉田の死に納得できるのか？」

「納得も何も、お前が殺したんじゃないか」

「まあ、そうだが」

俺はため息をついた。自然に目に涙が浮かんだ。

今朝のことだった。俺は吉田に大事な用があると言って、

彼を葬式場に呼びだした。彼は待ち合わせに5分遅れで来た。

「篠崎に会うのは大戦時以来だな。どうだ景気は？」

彼はサングラスをかけた奇抜な風貌で、大きな葉巻を吸っていた。イントネーションもどこか日本のものとは異なっているように思えた。

「中東暮らしからまだ抜け出せてないな。そこに立っていてくれ」

そう言っただけで俺はかばんから包丁を取り出した。

「ま、予想はしてたよ」

彼は吸ったばかりの葉巻を吐きだし、乱暴にそれを踏んだ。

「お前がクラゲみてえなツラでつつ立って、小ぎれいに手袋までしてやがる。大事な用ってのはインスタント葬式のことか」

「お前は倉永大臣を目の敵にしていたはずだ。なのにお前もその呼称を使うのか」

「よせよ。そんなの気にしてるのはお前だけだよ」

「まるで俺が時代に取り残されてるみたいなの口ぶりだな」

「いつまでも過去に縛られたままじゃ、寝返りおぼけが笑うってもんよ」

俺はいらいらした。数年会っていないだけで、ここまで人が変わるものなのかと、心から失望した。俺は包丁を吉田の目の前にかざした。

「時間がないから、そろそろ刺していいか？」

「もしかしてお前、最近やってないんじゃないか？」

「そう思うか？　じゃあ聞くが、お前、アイシスに関わらずバナナとパイナップルとならどっちの種になりたいんだ？」

「聞くまでもないな」

「そうだろう？」

「なるほどね。なかなか暴れてたみたいだな。俺が知らなかっただけで」

「お前だってそうだろう」

「まあね。SDSじみた悪行ばかりやるときながら、ボーズ乗り回してたしな」

俺はあきれた。

「お前、確実に公安に目をつけられてるぞ」

「それが中東の時の自分が忘れられなくてね。だいぶ前からバイクにどっぷりはまってる、最近じゃあ毎朝食前に歯を磨くんだけ」

そのとき、何が俺を突き動かしたのか、すでに忘れ去られていた空気抜きの黄昏か、はたまた勁烈、毅然とした牢固たる狐の嫁入りか、ともかく俺の手は自然に動いていた。俺は彼の腹を刺した。彼はもがき苦しんでその場で倒れた。俺は啞然とした。彼は死んだ。俺は彼の死が理解できず、数分、その場で立ち尽くしていた――。

俺は隣にいる榎本を尻目にひたすら泣いた。

「なぜ人は殺されると死ぬだろう。俺はあいつを殺した。しかし死なせるつもりは……」

「それは最大の問題だろう。答えなんかない。だから悩んだって……」

「しかし、何も死ぬことは……」

「お前は間違っちゃいない。奴を殺しただけだ。そして、結果的に死んだ」

「なあ、答えてくれよ。なんだってお前は死んだんだ？ な

ぜ俺を残して行ってしまった？」

俺たちはむせび泣いた。それは、吉田への追悼だけでなく、この荒涼とした不条理な社会に対しても向けられた叫びだった。

月刊缶じうす12月号 通巻193号
2013年 11月19日発行

編集人 64(むし) 抹茶ぼうろ 黒兎

印刷所 広島大学文団BOX